

連載へまつやま 人・彩時記

(35)

明治・大正・昭和を生きた
女流学校経営の草分け

船田 ミサヲ

元松山市考古館長
伊予史談会会員

大野 慶一

一・船田ミサヲの生涯

女子に教育は不用だと明治、大正の人は言う。将来を担う子供に教育を、それも男だけでなく、女にも教育を施して、立派な母親になるべく子供の育成を目指し、女子教育の必要を説いた人がいた。それが、船田ミサヲである。今日の済美高校を創立し、幾多のすばらしい女子を育成したこの人



船田 ミサヲ

そうした中で、明治三十六年(一九〇三)、若くして小学校の教員になった。良妻賢母の教育を目指した明治の時代にあつては、かなり型破りの性格であり、先覚者ではなからうか。ミサヲの父、白川親応(ちかまさ)は、松山

は、明治五年(一八七二)、松山市の柳井町に生まれ、昭和三十一年(一九五〇)、八十五歳まで、女子教育者として理想を実現すべくその誇りを持ち続けた人である。父は材木商を営み、かなり富裕な生活を送っていたようだが、事業がうまく続かず、その中で急死した。母は、一人で子供四人を貧しい生活の中で育てあげ、子供の教育には決してお金を惜しまなかった、という。このような母親の姿にミサヲは大きな影響を受けたと思われる。

藩の上級武士であり、前に述べたように材木商を営んでおり、それがうまくいっていた頃は、白川座という芝居小屋も経営していた。父は、当時ずい分ハイカラであつたそうで、長崎のランプを買つて早くから灯を点したり、ラシヤのマントを羽織つて写真におさまつたりしたという。兄姉は三人おり、上二人の兄のうち、相続人はすぐ上の、後に陸軍大将になつた白川義則であつた。

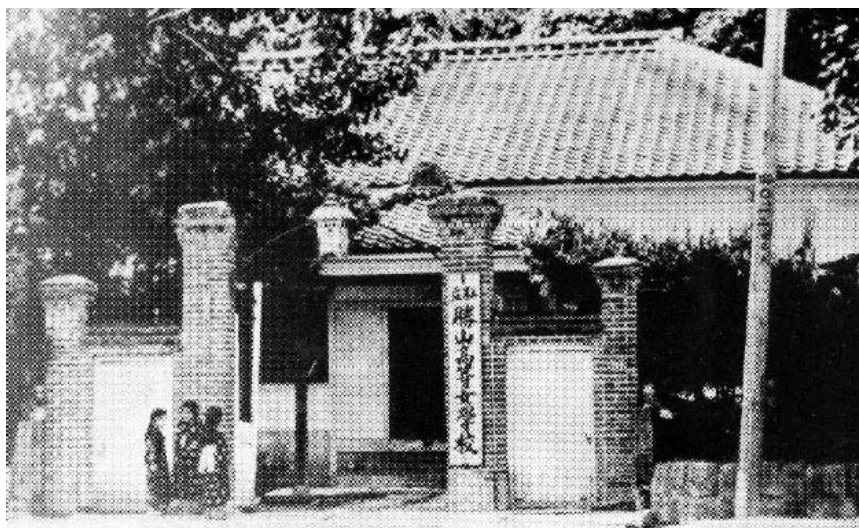
ミサヲは末っ子の娘で大切にされ、武士の家としての躰や、それに相応しい教養を与えられていた。しかし、父の商売はしだいに武士の商法として行き詰まり、一番町の立派な屋敷も芝居小屋も人手に渡り、苦しい生活の中で父は世を去つた。一家の生活は苦しくなり、兄の義則は、無料の陸軍教導団、後の士官学校に入つて軍人を目指し、ミサヲは、十四歳で教員見習いとなつたのである。

二・結婚と教員生活

教員見習いをしてながら、同じ学校で知り合つた船田金太郎と相思相愛の仲になつた。金太郎は

やがて東京へ行き、職工学校を卒業して印刷局の技師になつたが、松山の伊予鉄道に就職し、ミサヲが二十歳になつた時に、技師長になつた。二人はこれを機会に結婚する。決して浮いた話ではないが、この時代に珍しく恋愛結婚であるといえる。

ミサヲは、同時に松山幼稚園の保母主任となり、共働きを続けた。幼稚園とも保育園ともつかない形で「母の会」の世話もし、家事も



勝山高等女学校正門(明治42年)



船田一家。船田金太郎（後左）、白川義則（後右）

決してゆるがせにはしなかった。

丁度その頃、澤田亀の経営する澤田裁縫伝習所が開かれ、女手一つで経営している彼女と意気投合して仕事を共にし、以後二人は、終生の友人としてつき合った。

亀は、高知県生まれの人に似合わず、地味な性格で、決して派手なふるまいはしなかったが、経営の対外的な交渉は、ほとんどミサヲが担当したようである。

ミサヲは外交的で人づき合いがよく、幼稚園の仕事のみならず、勝山婦人会の世話もし、更に勝山女学校の経営もまかされるに至った。

当時の女先生が教えたのは、主に家庭科だったが、「母親の育て

方で子供の人格は決まる」という信念を持ち、女子教育に当たった。

家庭生活も幸福であったが、ミサヲは芸事も好きであり、その趣味は多方面にまたがっていた。小さい時から習ったお琴は勿論、日本画も描くし、書道も大変上手であって、薩摩琵琶も習い、晩年は謡曲もたしなんでいる。夫とも仲むつまじく、女の子が一人生まれ

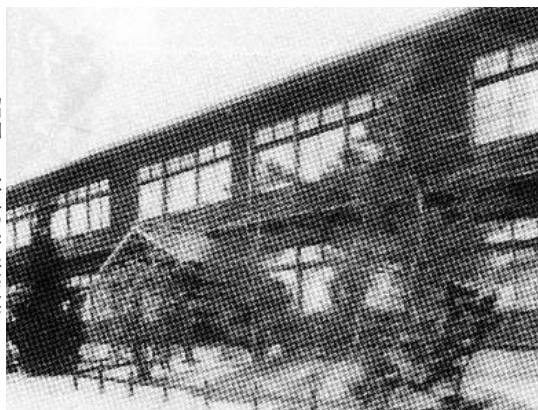
た。夫は伊予鉄道の技師長として湯山発電所開発の指揮をとり、四国初の水力発電に成功するなどの活躍をしたが、大正七年（一九一八）、五十四歳で病没した。

ミサヲは、一時勝山女学校から離れ、家政女学会を設立したが、

裁縫学校を合併して高等女学校を作ることを意図して、ミサヲの家政女学会と澤田裁縫学校を合同して愛媛実科女学校とし、これに勝山女学校を合併して、明治四十四年（一九二一）、私立済美女学校を誕生させた。

三、学校経営と資金集め

学校経営には多大の資金が必要である。済美女学校設立以降のミサヲの半生は、資金を集めるための各方面への働きかけが主であった。その強力な後ろ楯となったのは、兄の義則であった。義則は軍人として日露戦争にも従軍し、次第に出世をして、ついに大将にまで昇進し、昭和七年（一九三二）、上海で戦死するまで、温かく妹への援助を惜しまなかったという。



昭和4年頃の済美校舎



昭和12年頃の校舎

単に有名な軍人ということではなくて、妹のため、教育立国のため、種々の会合に出席して応援をしてくれたことに対して、ミサヲは大変幸運であったといえよう。

ミサヲの活動は男性的な行動力を持ち、学校経営にも腕を揮ったが、家庭科の一般教師としての彼女の授業は、親しみがもて、わかり易い講義で生徒に慕われていた。自ら勝ち得た経験と自由な知識でもって、厳しい中に簡単明瞭な教え方で、授業時間の合間に楽しい余談をして興味を持たせたりした。

四 戦中と公職追放

第二次世界大戦による空襲と敗戦は、ミサヲにとって大きな試練であった。戦争による学校の焼失、用務員さんの家族や防空に従事しての殉職など、大変大きな損害で、ミサヲは悲嘆にくれた。敗戦まもなく、学校再建に取りかかったが、かつての白川大将の妹という肩書きはもはや効き目はない。連日、焼け野原の東京や、各地へ寄付集めに出かけたが、人心の荒廃は如何ともしがたい。そういう最中に、さらなる打撃がミサヲを襲った。それは公職追放である。戦争中、国防婦人会の役員であったため、教壇から追放されたのである。愛する済美学園を離れ、教職を失うことは、ミサヲにとって最大の打撃であった。成人した子供も、



済美校で兄・義則とともに（昭和3年）



船田ミサヲの胸像

松山を離れることを勧めたが、ミサヲは松山を離れようとはしなかつた。周囲の人々の熱心な運動もあり、ミサヲの追放は二年足らずで解除された。

五 済美学園とミサヲ

「済美の由来」(済は済と同字)

「春秋左氏伝」(文公十八年)の中にある。

「世々濟其美、不隕其名」

(世々その美を濟し、その名をおとさず)から採られたもの。意味は「子孫が父祖の遺業を継いで、よい行いをする事」

晩年、ミサヲは各方面より教育者としての榮譽に輝いた。

- 昭和二十五年(一九五〇)には、愛媛県知事表彰
- 昭和二十八年(一九五三)には、文部大臣賞
- 昭和三十一年(一九五六)には、藍綬褒章を受けた。

更に、県で初めて

婦人問題研究会を開くなど、女性運動でも活躍をした。教育者として、将又(は

たまた)女性運動家としても、建学の精神を受け継ぎながら、創立百年余りを迎えたのである。惜しくも昭和三十一年(一九五六)、五月十九日、松山市の新玉町一丁目七十番地の自宅で逝去された。享年八十五歳。

昭和三十一年(一九五六)十一月には、ミサヲの胸像が建立されて、済美学園の永遠の発展を見守っている。

最後に、昭和三十一年(一九五六)四月、逝去される一カ月前の済美高校の入学式には、病をおして駆けつけて来られた。痛ましいほどにやせ衰えた体を両側から支えられ、抱えられるようにして壇



胸像の除幕式（昭和31年）

上に上がられたが、立つと同時に背筋を伸ばして、何のよどみもなく、見事に祝辞を述べられた姿は、永遠に忘れられない明治女の生涯であったという。

【参考文献】

- 一、創立八十年記念誌 済美高等学校
- 二、えひめ偉人伝(一〇一) 船田ミサヲ 愛媛新聞社
- 三、伊予人(ヒーロー列伝) 船田 操 百点会編集
- 四、愛媛県史(人物) 船田ミサヲ 愛媛県発行